

『古代アメリカ』4, 2001, pp. 111-114

<書評>

*Mito y realidad de Zuyuá: Serpiente Emplumada y las transformaciones mesoamericanas del Clásico al Posclásico.* Alfredo López Austin y Leonardo López Luján. El Colegio de México-Fidecomiso Historia de las Américas-Fondo de Cultura Económica, México, 1999, 168 págs.

井上幸孝（神戸市外国語大学大学院）

キルヒホフ [Vivó, Kirchhoff, et al. 1992: 28-45] が文化領域としての「メソアメリカ」を定義してから、既に半世紀以上が経過する。現在、多くの研究者の関心は、メソアメリカに含まれる諸地域が均質な文化を共有していたか否かという単純な議論ではなく、メソアメリカ文化圏としての一定の共通性を認めながら、その中に含まれる各地域独自の特徴や地域間の差異を明らかにすることに移行してきている。また、キルヒホフが定義したメソアメリカとは16世紀の状況に基づいていたが、現在では、後古典期のみならず、それ以前の時代も視野に入れたメソアメリカ概念の検討が進められている [Matos Moctezuma 1994; Ochoa, Ortiz-Díaz y Gutiérrez 1999]。

本書は、このような空間的・時間的両側面を視野に入れて、メソアメリカ全般の古典期から後古典期への推移を説明しようとする一つの試みである。本書の表題（『スユアの神話と現実—羽毛の蛇とメソアメリカ古典期から後古典期への変容』）に用いられている「スユア-Zuyuá」とは、『チラム・バラムの書』から取られた用語である [ル・クレジオ 1981: 82-98; Florescano 1999: 175-216]。『ポボル・ヴフ』では、トゥラーン=スイヴァ Tulán-Zuiva、ヴクブ=シヴァーン Vucub-Zivánなどと表現され [レシーノス 1977: 132]、ナワトル語ではトラン Tollan、チコモストク Chicomóztocなどの名で知られる神話的な起源の地を指す。

著者の一人、ロペス・アウスティンは高名なメソアメリカ研究者で、『人間=神—ナワトル世界の宗教と政治 *Hombre-Dios: religión y política en el mundo náhuatl*』（1973年）、『人体と思想—古代ナワ人の概念 *Cuerpo humano e ideología: las concepciones de los antiguos nahuas*』（1980年）、『フクロネズミの神話 *Los mitos del tlacuache*』（1990年）、『タモアンチャンとトラロカン *Tamoanchan y Tlalocan*』（1994年）などを主著とするメキシコの歴史家である。日本では、一冊の著書 [ロペス・アウスティン 1993] といくつかの論考（『Iichiko』誌上）が既に翻訳・紹介されており、二度の来日・講演も果たしている。共著者である彼の息子ロペス・ルハンは、テノチティトラン（テンプロ・マヨール）やテオティワカンの発掘に携る考古学者で、『メシーカ人によるテオティワカンの過去の回復 *La recuperación mexicana del pasado teotihuacano*』（1989年）、『テンプロ・マヨールの供物 *Las ofrendas del Templo Mayor de Tenochtitlan*』（1993年）などの著書がある。

本書は先に公刊されたメソアメリカ史の概説書、『先住民の過去』において両著者が提起した問題 [López Austin y López Luján 1996: 247-271] を掘り下げ、個別に論じたものである。

序に続く最初の章「古典期から後古典期への変容」では、これまでの研究史を追いながら、本書の研究対象と著者の立場が示されている。まず、古典期＝神官支配の平和的社会、後古典期＝世俗支配の軍事的社会というかつての単純な図式が修正を迫られている中で、著者は前者から後者への移行期の特徴の一つである宗教と政治の接合に着目し、この現象の特徴を探ることが本書の意図であると述べている。

次の「論争の中心、チチェン・イツァとトゥーラ」と題された章では、チチェン・イツァとトゥーラの類似に関する論争を主にジョーンズに依拠して紹介し、その後、著者の立場が示される。チチェン・イツァの様式がメキシコ中央部の様式を意図的に再現したもので、その背後には政治的な理由があったとするジョーンズの仮説を概ね認めているものの、問題はトゥーラとチチェン・イツァの二都市だけでなく、より広い文脈で考える必要があると著者は主張する。

続く「モデル」では、地域における関係を革新しようとした政治的な活動とそれを支えていた思想体系のつながりを明らかにするという本書の目的が明らかにされる。その担い手の名称を特定の民族名で表現するのが困難であるため、「スユアー」の用語が提唱されている。著者が提示するモデルは、①覇権的集団の思想、②その思想と政治の接合、の二つである。本書が扱うのは、説明モデルの形成を含めた対象の全般的な把握であり、特定の時間と場所を扱った個別的な研究ではないことも注記されている。それゆえ、本書が示すモデルは歴史的過程が明らかになるよう取り組んだものであり、方法論的な指針となることを目指したあくまで仮説的なものであるという。最初のモデルはスユアー思想の神話的・宗教的支柱となるもので、従来の伝統をうまく適合させたものである。すなわち、多民族の状況下で多様性を否定することなく統一性を生み出そうとしたのが共通の起源地（トラン）と「羽毛の蛇」（ケツアルコアトル）であり、羽毛の蛇は時間的・空間的秩序の源とされる。この思想と政治の接合に関するもう一つのモデルは、すべての人々が同じ起源を持つという思想が実際の政治組織に投影され、既存の政体を統合する形での政治的統一を生み出したというものである。

次の「メソアメリカ諸地域の事例」では、メソアメリカの5つの地域を取り上げ、スユアーに関するモデルのもとになった事例が取り上げられる。

最初のメキシコ中央部では、まず、7～8世紀（メテペク期）のテオティワカン、ショチカルコ、カカシュトラ、テオテナンゴにおけるスユアー思想の芽生えと考えられる兆候、イダルゴ州トゥーラと神話的都市トランの問題が取り上げられる。続いて、チョルーラにおけるスユアー体制が既存の伝統を利用したものであることが『トルテカ＝チチメカ史 *Historia tolteca-chichimeca*』に基づいて示される。もう一つの例はメシコ＝テノチティトランである。後古典期後期のメキシコ盆地部におけるスユアー思想とそれを反映した政治体制エシュカン・トラトロヤン（テノチティトラン、テスココ、トラコパンの三都市による支配体制）が取り上げられている。そして、スペイン人到来時には、メシーカ人が部族神ウィツィロポチトリに重要な役割を与えてこの神を他の人々に強制しつつあり、羽毛の蛇（ケツアルコアトル）を思想的支えとするスユアー的な体制からより中央集権的な体制に移行する過渡期にあったことが指摘される。

次の低地マヤに関しては、まず9世紀のパシオン川流域（セイバル、アルタール・デ・サクリフィシオス）の考古学資料に基づいてスユアー的要素の出現の兆候が指摘される。その後、チチェン・イツァにおける多民族状況とスユアー支配体制、およびマヤパン同盟（チチェン・イツァ、ウシュ

マル、マヤパンからなる政治組織)の問題が取り上げられる。

第三はグアテマラ高地に関してで、『ポボル・ヴフ』、『トトニカパンの権原書 *Título de Tonicapán*』、『ソロラーの覚書 *Memorial de Sololá*』の読解を通してこの地域にスユアー的な思想基盤があったことを明らかにしている。その一方で、チャクモールやトルテカ的な装束の戦士像などいくつかの要素が欠けていることにも言及している。

第四に、後古典期オアハカ(ミシュテカ)地域が取り上げられる。この地域の豊富な絵文書を主に用いながら、政治的には分裂していたにもかかわらず、スユアー的な思想背景を有していたことを指摘する。羽毛の蛇として世界秩序を確立したとされる神話的人物(9=風・羽毛の蛇)とスユアー的な政治体制を導入しようと試みた11世紀の人物(8=鹿・ジャガーの爪)の例が言及されている。

最後に、14~15世紀のミチョアカンにおけるスユアー思想とそれに基づいた政治体制(パツクアロ、イファツィオ、ツィンツンツァンの三都市による支配)の例が扱われる。チャクモールやツォンパントリといったスユアー的要素の存在も紹介した上で、メシーカ人の場合と同様、タラスコ人も、クリカウエリ神を中心に据えた新たな思想を強制することで、スユアー的な体制から脱しつつあったことが指摘されている。

「結論」では、7~16世紀のメソアメリカの様々な場所でスユアー思想が見られ、その思想は政治と接合されていたことが確認される。また、スユアー的な体制の推進者は一つの首都による帝国を目指したのではないこと、スユアー的なものとトルテカ的なもの(あるいは、これらに対応する地名としてのトラン=スユアーとイダルゴ州トゥーラ)は同一ではなく、イダルゴ州トゥーラはスユアー的なものを受け容れてそれを普及させる役割を果たしたに過ぎないことが付け加えられている。

本書が解決しきれていない最大の問題点は、著者自身が結論で述べているように、スユアー思想の起源が不明なことである。したがって、「スユアー的」諸要素がどこを起点とし、どのような経路で流布していったかを今後明らかにしていく必要がある。これに関連して、どのような要素がスユアー的と呼べるのかを明確に定義する必要があるだろう。著者がスユアー的要素と見なしているチャクモール、ツォンパントリ、トルテカ的な戦士像、アトランテなどの分布、さらには、それを踏まえた上での各要素の起源と伝播経路がある程度明らかにされれば、本書のモデルはより説得力を持ったものになる。

昨年、アメリカで刊行された論文集に本書の英語要約版が収められた[Carrasco, Jones and Sessions 2000: 21-84]。本書とその英語要約版の出版によって、メソアメリカ史における最重要な歴史的過程のひとつを解き明かすための議論が活性化され、メソアメリカ全体を視野に入れた上での個別地域の研究が今後さらに深まっていくことを期待したい。

## 参考文献

Carrasco, David, Lindsay Jones, and Scott Sessions (eds.)

2000 *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*. Colorado, University Press of Colorado.

Florescano, Enrique

1999 *Memoria indígena*. México, Taurus.

ル・クレジオ, J・M・G (原訳)

1981 『マヤ神話—チラム・バラムの予言—』 望月芳郎訳、新潮社。

ロペス=アウスティン, アルフレド

1993 『月のうさぎ—メソアメリカの神話学』 篠原愛人・北條ゆかり訳、文化科学高等研究院。

López Austin, Alfredo, y Leonardo López Luján

1996 *El pasado indígena*. México, El Colegio de México-Fidecomiso Historia de las Américas-Fondo de Cultura Económica.

Matos Moctezuma, Eduardo

1994 “Mesoamérica”, en *Historia Historia antigua de México*, vol. I, Linda Manzanilla y Leonardo López Luján (coords.), México, UNAM-INAH-Miguel Ángel Porrúa, pp. 49-73.

Ochoa, Lorenzo, Edith Ortiz-Díaz, y Gerardo Gutiérrez

1999 “Diversidad geográfica y unidad cultural de Mesoamérica”, en *Historia general de América Latina*, vol. I, Teresa Rojas Rabiela y John V. Murra (eds.), París, UNESCO-Trotta, pp. 69-97.

レシーノス, アドリアン (原訳)

1977 『ポボル・ヴァフ』 林屋永吉訳、中公文庫。

Vivó, Jorge A., Paul Kirchhoff, et al.

1992 *Una definición de Mesoamérica*. México, UNAM.